

1. 「国際力」をつける

1.1. DNGL 特別講演 「紛争地での赤十字国際委員会 (ICRC) の活動」

2014年10月1日 18時20分～20時10分

日本赤十字看護大学 601 教室

Dr. Mohamed Dawood Sayed AliKhan (President of Afganistan Mirwase Hospital) と Mr. Apollo Kinyokie Barasa (赤十字国際委員会 International Committee of the Red Cross =ICRC Teaching Nurse) が来校され、紛争地での赤十字国際委員会(以下、ICRC)の活動について講演をしていただきました。また、名古屋第二赤十字病院伊藤看護副部長 (Afganistan Mirwase Hospital にて活動経験あり) も来校され、実際の紛争地の病院で、看護師として働くことについても討議しました。

【学生の学び】

齋藤結香 (2014年入学)

今回の紛争地における ICRC の活動の講演を通し、スタッフとマネジメントの両側面から重要な学びを得ました。特に、過酷な状況下で任務を全うする忍耐力や、判断力、あらゆる環境への適応能力、状況やリスクの分析能力などが求められると感じました。

私たちの少ない海外活動経験を振り返ると、「安全とは、自分で見極めて得ていくものである」という認識が薄かったように思います。ICRC は主に紛争地帯で活動を展開しているので、常に危険な状況の中にいるということを念頭に置き、全員が同じように危機管理をしていくべきであると実感しました。危機管理に対する考え方は、現在の私達にとって非常に弱い部分であるとも考えています。日本国内にいる限り、常に紛争の状態にある場所と比べると、危機管理に対する知識とスキルが不十分であり、そこが私達の今後の課題でもあります。このような貴重な活動の講演を拝聴したり、また危機管理に関する研修に参加するなど、積極的に自己研鑽に努めていかなければならないと強く感じています。

Dr. Mohamed は国際人道法を世界に広めていくことが重要である、と話をしていました。紛争など状況下では、人命が危険にさらされたり、失われたりすることが日常的に起こります。人命の尊さ、人間が守るべきものを問いかけ続ける ICRC の地道な活動の大切さを改めて実感しました。



1.2. 第3回国連防災世界会議 参加

2015年3月14日～18日

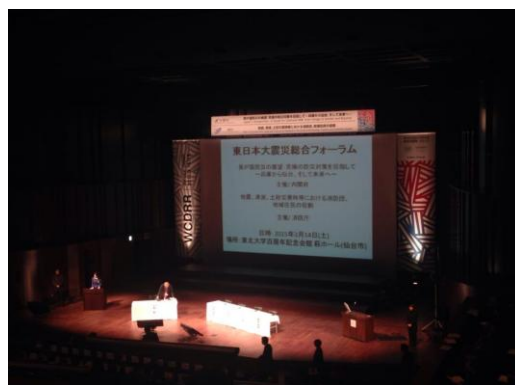
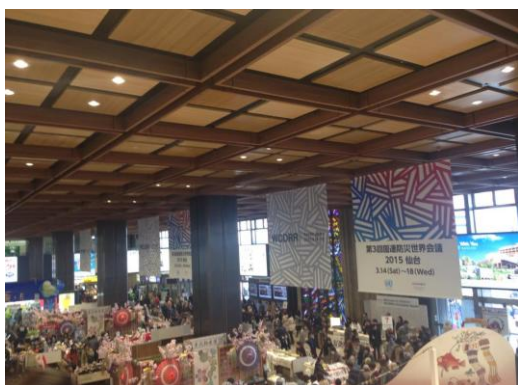
宮城県仙台市

UNISDR の発表によると、国連加盟国 197 カ国から 6,500 人以上の首脳・閣僚を含む政府代表団、国際機関、認定 NGO などが本体会議に参加し、5 日間で国際的な防災戦略を話し合いました。各国からは防災担当者だけでなく、首脳や閣僚が多数参加し、日本で過去に開催された国連関連会議の中でも最大級でした。また、仙台市によると一般向けのイベント・展示への参加者を合わせると来場者数は 14 万人と発表されました。

【学生の学び】

齋藤結香（2014 年入学）

私は、DNGL の学生として一般のシンポジウムや講演会に参加しました。残念ながら、本体会議に参加する権利はなかったのですが、パブリックフォーラム 1 つ、講演会 4 つ、DNGL 学生企画のディスカッション 1 つに参加しました。本大会への参加を通して、国連で取り組んでいる防災についての取り組みを目の当たりにしました。災害看護だけでなく様々な機関の防災対策と連携しながら、世界全体で対策を立てていることを実感しました。それぞれのセッションでも「連携」や「顔の見える関係」がキーワードになっていました。各組織がどのような取り組みをしているのかについて学びましたが、市民や NGO、各機関や自治体とどのように関わっているか、具体的にはあまり見えなかったと個人的には感じています。「連携」に対する私の基礎知識も不十分であるということも分かったので、国連世界防災会議を機に、今後も自己学習を続け、物事をより俯瞰的に捉えて、統合できるよう努力していきたいと考えています。



1.3. WHO、UNHCR、国際赤十字・赤新月社連盟、赤十字国際委員会等での研修

2015年3月19日～25日

スイス連邦ジュネーブ州

今回は、日本赤十字看護大学大学院の DNGL の学生として、これらのジュネーブの国際機関のうち、赤十字国際委員会 (ICRC)、国際赤十字赤新月社連盟 (International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies =IFRC)、世界保健機関 (WHO)、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の本部と、本学と MOU を締結したラ・ソース大学を訪問しました。

【学生の学び】

齋藤結香 (2014年入学)

スイス連邦は、ヨーロッパにある永世中立国です。ジュネーブは、国連欧州本部、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、国連人権高等弁務官事務所 (OHCHR) などの国連諸機関、世界保健機関 (WHO) などの国連の専門機関、さらに赤十字国際委員会 (ICRC)、国際赤十字赤新月社連盟 (IFRC) といった多数の国際機関が集結した都市です。昨今では、国家間の結びつきの多様性、環境や感染症問題、あらゆる災害のように、国家単独での取り組みでは十分でない、複数国家もしくは国際機関を巻き込んだグローバルな課題が増えています。今までの DNGL の授業や参加した学会においても、国際機関の取り組みの実際や、防災・減災に取り組む重要な役割を果たしていることを学んできました。

本研修の目的は、ICRC、IFRC、WHO、UNHCR 等を訪問することで、国際機関の本部における実際の活動と機能、並びにそれら機関で活躍しているリーダーの役割・責任について学びを深め、災害看護グローバルリーダーのイメージを具体的にし、今後の自己の学習ニーズを明確にして活かすことでした。目標の一つひとつを振り返ると課題が残りますが、各機関への訪問を通して使命感や責任感を学んだことは大変貴重な経験でした。今後も、さらに自己の学習ニーズを主体的に探りながら、学業に取り組んでいきたいと考えます。

参考：日程表

日程	時間	内容
3/20(金)	12:00	WHO 訪問
	15:00	国際赤十字・赤新月社連盟訪問
3/21(土)	朝	国際赤十字・赤新月博物館訪問
	午後	赤十字関連史跡視察
3/22(日)		赤十字関連史跡視察 続き
3/23(月)	09:30	ラ・ソース大学訪問
	14:30	ローザンヌ～ジュネーブ
	15:00	UNHCR 訪問
3/24(火)	09:30	ICRC 訪問
	12:00	ICRC 看護関係者とのランチ・セッション
	18:25	ジュネーブ発～フランクフルト



1.4. フィリピン中部台風救援事業における評価プロジェクトでのインターンシップ

2015年5月6日(水)～5月10日(日)

フィリピン共和国セブ州(セブ島)

2013年に発生した台風 Haiyan の被災者への復興支援として実施されている、日本赤十字社フィリピン中部台風救援事業があります。この事業の一環として評価プロジェクトがあります。今回は、中間評価のためにセブ島で現地調査をしました。

学生は、フィリピンのセブ北部で復興支援事業の状況、及び被災者の生活を知ることがを目的にリサーチアシスタントとして参加しました。

【学生の学び】

池田稔子 (2014年入学)

今回は、セブ島の5つの Barangay の生活再建支援の成果評価にリサーチアシスタントとして同行する中で、被災者の健康問題や生活状況を見ていきました。Haiyan 以前のセブ島の下水道普及率は 71%

で被災後は 50%台に低下したといわれます。村部の人々は沈殿槽のトイレが主流で、トイレは数軒で 1 つを使用していることも多く、近くの草原で用を足すことも日常です。上気道感染や皮膚疾患が多く、食事の偏りから心血管疾患や高血圧・糖尿病などの生活習慣病も増加しています。また、住民 1 人当たりの医師看護師数が不足しているため、ヘルスワーカーやボランティア育成が重要ですが、今回の調査からは、まだまだ地域差がみられ、適時介入やモニタリングの必要があることが分かりました。

今回、リサーチアシスタントの体験からカウンターパートと十分な連絡調整、書類、物品、安全対策など渡航前準備が短期間で調査の成果をあげるために重要であることを学びました。また様々なトラブルに対応する知識も必要です。調査中は、関係先やチーム内の情報交換・連絡を密に取ることで、そして何よりも調査対象者の方への配慮を怠らないことを再確認しました。支援は継続的に行うもので、被災者と支援者との関係を如何に作り上げていくかが調査の質を上げていくことを学びました。



<Barangay 聞き取り調査>



<Barangay ヘルスセンター>



<沈殿槽式トイレ>



<村の水源（井戸）>